

はじめに

平成 22 年 4 月から、「企業社会論」と銘打って、神奈川県厚木市にある松蔭大学の非常勤講師として教壇に立っている。卒業後に社会人となる学生たちに、少しでも企業社会の空気を味わってもらおうという意図で始めた講座である。学生が大学で何を学んだかが問われる時代（出口管理が問われる時代）となっており、また、大学全入時代を迎え、入試という入口段階の質保証が機能しなくなった大学でも必要とされる内容をと考えたからである。

当初は、企業とは何かとか、企業社会の歴史といった概念的な内容だったが、途中からあることに気がついた。それは、こちらが伝えたい内容と学生のニーズにズレが生じていたことである。一人前の社会人になろうとしている彼らにとって、社会に出ることは不安であり、その不安を解消する手立てをこちら側に求めているのである。

大学には、専門性を有する高度な知識を賦与するという役割がある。反面、大学には社会に出る若者にとって最終的な“学びの場”の役割もある。社会人としてのマナーと心構えを備えたうえで知識を身に付けなければ、大学での教育は砂上の楼閣となりかねない。

かつては、親や地域が最低限のマナーと心構えを教えていた。それが今日では、その機能を失い学校に期待するようになった。ところが、期待された学校では、モンスターペアレントと言われる過剰な親の存在などもあり、学生たちを“お客さま”扱いし、深くコミットすることを避ける傾向が見られる。進学のために学業成績のみを重視し、社会人としての常識を教える機会もなければ場もない状況にある。結果、社会生活については何も教えられずに社会に送り出され、壁（特に対人関係での振舞い方）にぶち当たる悲劇を招いてしまっている。

一方、企業の人事担当者からは「最近の新入社員は基本的なマナーが具わっていない」という声が聞かれる。以前は、一定水準の一般教養を具えていることを前提に採用し、企業社会に必要な知識や態度—これには各企業独自のものがあるが—は入社後に教育された。新入社員の生活態度まで鍛える所謂「鬼軍曹」と呼ばれる人がいたりもした。「散髪に行け」「髭の剃り残しがみっともない」などの小言を言われ、「職場の仲間で飲むときは新人が勘定を全部支払い、翌日割り勘を請求するものだ」等々と教えられたものである。つまり、家庭・地域教育に鬼軍曹の教育がプラスされ、一人前の企業人（社会人）に成長していったのである。

今日、企業では「即戦力」の名に隠れて、マナーや心構えを教える人が少なくなったと感じる。人同士の繋がりが希薄となり、他人への関心が薄く自己中心的に振舞う人が増えてきたことが大きな原因であるが、利己的になりすぎ育てようという責任感・使命感が薄れてきたこと、企業人モデルがなくなり教育する側の自信が失われてきたことも要因の一つとして考えられる。

一度教えられたことを守らなかった結果は自己責任である。しかし、教えられないままに壁にぶつかり、それが自己責任とされるのは如何なものだろうか。壁にぶつかってしま

い苦しんでいる社員を救うのは企業の責任である。企業は即戦力を求める傾向にあるが、「採用は企業防衛の第一歩」となっている今日、企業は新入社員教育の重要性を認識しなければいけないのではないだろうか。

一人前の社会人になりたいが、どのような振舞い方をすればいいのかわからないという学生の不安。最低限のマナーは身につけて入社してほしいという企業のニーズ。社会に出る最後の“学びの場”として、担当する「企業社会論」の講義では、社会人としてのマナーと心構えを主要内容とすることにした。

学生には社会人としての振舞い方の参考として、企業には新入社員教育の補完として活用していただければ嬉しい限りである。